

## 災害の中で生きる

〔聖書〕列王記上 17章 1～16節

ギレアドの住民である、ティシュベ人エリヤはアハブに言った。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。わたしが告げるまで、数年の間、露も降りず、雨も降らないであろう。」主の言葉がエリヤに臨んだ。「ここを去り、東に向かい、ヨルダンの東にあるケリトの川のほとりに身を隠せ。その川の水を飲むがよい。わたしは鳥に命じて、そこであなたを養わせる。」エリヤは主が言われたように直ちに行動し、ヨルダンの東にあるケリトの川のほとりに行き、そこにとどまった。数羽の鳥が彼に、朝、パンと肉を、また夕べにも、パンと肉を運んで来た。水はその川から飲んだ。しばらくたって、その川も涸れてしまった。雨がこの地方に降らなかったからである。

また主の言葉がエリヤに臨んだ。「立ってシドンのサレプタに行き、そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」彼は立ってサレプタに行った。町の入り口まで来ると、一人のやもめが薪を拾っていた。エリヤはやもめに声をかけ、「器に少々水を持って来て、わたしに飲ませてください」と言った。彼女が取りに行こうとすると、エリヤは声をかけ、「パンも一切れ、手に持って来てください」と言った。彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦粉と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです。」エリヤは言った。「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。主が地の面に雨を降らせる日まで／壺の粉は尽きることなく／瓶の油はなくなる。」やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。こうして彼女もエリヤも、彼女の家の者も、幾日も食べ物に事欠かなかった。主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくならなかった。

### 〔序〕大飢饉の到来

今回はソロモン王について学びました。彼は偉大な父ダビデが建てた強大な王国を年若くして受け継いだ時、善悪を判断して正しい裁きを行う知恵を、神さまに願い求めました。そして授かった類まれな知恵を用いて、イスラエルを、世界に栄華を誇る王国にしました。しかし息子レハベアムの代になりますと、北10部族が離反して分裂し、南のユダ一部族のみの小国に転落してしまいました。

さて私たちの聖書の学びは、今日から3回にわたって、旧約聖書の代表的預言者エリヤについて学びます。エリヤの物語は、分裂した北王国第七代の王アハブの前に現れて、大飢饉の到来を宣告するところから始まります。

アハブは、シドン王の娘イゼベルを王妃に迎えました。彼女は都のサマリアにバアルの神殿を建て、祭壇を築いて熱心にその信仰を広め始めました。夫のアハブも彼女に追従して偶像礼拝に走ったので、主なる神は大飢饉という裁きを下そうとなさったのです。しかしアハブのことです。悔い改

めるところか、そのような不吉なことを語るエリヤを恐れ憎んで、抹殺しようとするに決まっています。神さまは王の怒りからエリヤをお守りになりました。

### [1]鳥とやもめに養われて

「ここを去り東に向い、ヨルダンの東にあるケリトの川のほとりに身を隠せ。その川の水を飲むがよい。わたしは鳥に命じて、そこであなたを養わせる」。エリヤは主が言われたように直ちに行動し、ヨルダンの東にあるケリトの川のほとりに行ってそこにとどまりました。すると数羽の鳥が、彼にパンと肉を運んで来てくれました。

鳥は旧約聖書では汚れた卑しい鳥とされています。その鳥がくちばしにくわえて運んでくるパンや肉です。普通のユダヤ人だったら汚らわしいと、手を引っ込めたことでしょう。鳥たちは朝に夕に運んで来てくれました。エリヤはそれを有難くいただいて、生き延びました。しかししばらくすると、川の水も涸れてしまいました。

神さまはエリヤに、ヨルダンの東の荒野から、西の地中海沿岸までイスラエルを横断して、サレプタに身をひそめるように命じられました。「わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる」。エリヤがサレプタの町の入り口まで来ますと、一人のやもめが薪を拾っていました。

「器に少々水を持って来て、わたしに飲ませてください」。エリヤの求めに応じて 彼女が水を取りに行こうとしたので、エリヤは更に頼みました。「パンも一切れ、手に持って来てください」。彼女は答えました。「わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。一握りの小麦粉とわずかな油しかありません。それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです」。

それでもエリヤは彼女に言いました。「恐れてはならない。まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後であなたとあなたの息子のためのパンを作りなさい。なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。主が地の面に雨を降らせる日まで、壺の粉は尽きることなく、瓶の油はなくなる」。

やもめはエリヤの言葉どおりにしました。すると彼女の家では小麦粉も油も尽きることがなく、飢饉の中で生き延びることができたのでした。その後のことです。彼女の大切な息子が病気にかかり、死んでしまいましたが、エリヤが祈りによって、その子を生き返らせました。彼女はエリヤに言いました。「わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です」(17:24)。

### [2]よし、へこたれないぞ

東日本大震災を目の当たりにした人々の中から、悲痛な叫びが起こりました。「神は、どうしてこのように悲惨な災害を許したのか。神は、人を殺し、地を殺し、家を殺し、善良な民やいたいけない子

どもたち、犬や猫にいたるまで、残酷な仕方で殺した。神は恵みの神ではなかったのか。否、もともと神など存在しなかったのだ。今や日本人は、存在しない神の幻想から自立して、自分の足で生きていかなければならない。」

しかし「神も仏もあるものか」と思った多くの人々が、やがて日本人固有の無常観に戻って行きました。「もともと命は、はかないものであり、世のすべては絶えず変化していく。一つとして確かなものはない」そして「現世ではつらい人生でも、来世では報いられますようにという信心に慰めを求めて、納得しようとしている。」とされています。さて皆さんは、今どのように感じておられますか。

大船渡市の山浦玄嗣(ハルツグ)医師の証を読みました。新約聖書をギリシャ語原典から気仙地方の言葉で訳したケセン語聖書を出版された、カトリック信者です。あの日、避難警報が出ていたけれども、自分の所は随分内陸なので大丈夫と思っていたそうです。

ところが外に出た看護師さんが「先生、水がきます！」と叫ぶのを聞いて「そのまま直ぐ逃げろ」と言い、診察室を出て自宅に駆け込み奥さんと逃げようとした。しかし奥さんがズボンに履き替えるのに手間どり逃げ遅れて、二階に避難しました。しかしあのまま外に出たら、水が首の下近くまで達したそうで、多分助からなかったでしょう。

翌日、水の引いた街に出て見ると、瓦礫の山。涙が出て仕方がありませんでした。その時、十字架の上でのイエスさまの叫びが心に響いてきたそうです。「エーリ、エーリ、レマ、サバクタニ わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」。そして山浦さん心に浮かんだ思いは「よし、へこたれないぞ！」だったのでした。

イエスさまの言葉は詩編22編の冒頭の言葉です。イエスさまはそれに続く言葉を口になさる前に絶命なさいました。しかしこの詩人は、続いて次のように歌っているのです。「だが、あなたは聖所にいまし、イスラエルの讚美を受けられるお方。わたしたちの先祖は、あなたにより頼み、より頼んで救われてきた。助けを求めて貴方に叫び、救い出され、あなたにより頼んで、裏切られたことはない」。

十字架にはり付けにされた絶望的な状況の中で、イエスさまは、「わたしの神さま、わたしの神さま、これまであなたにより頼んで裏切られたことは無かった」という詩編22編を歌われたのでした。イエスさまも、神さまがこの自分をお見捨てることは絶対になさらないと確信しておられたのです。山浦さんは、全てが押し流された破壊のただ中に立って、詩編22編を歌う十字架のイエスさまのお声を聞き取りました。「そうだ。神さまは私たちをお見捨てになることは絶対にはない。この苦難で万事がお終いになるのではない。必ず新しい道が神さまによって示される。よし、自分はへこたれないぞ！」と思ったのだそうです。

### [3]災害の中で生き抜く鍵

さて話をエリヤに戻します。彼は王の追及の及ばない遠い東のはずれ、荒野の川のほとりに身を隠せと、主から命じられました。人の住めない所で、一体毎日どうやって食べていけるのか。鳥によって養われる——そんなことが毎日続くでしょうか。私たちだったら、出発をためらいます。しかしエリヤは直ちに行動したのです。無鉄砲すぎませんか？でも神さまはちゃんと養っていただきました。

飢饉が更に深刻になり、川の水が涸れてしまいました。すると主は、国の外に出てサレプタの町のやもめの世話になれと、エリヤにお命じになりました。夫を失い一人で生きていかなければならない女性は、災害の苦しみを真っ先に受ける社会的弱者の典型です。食料不足が深刻になればなるほど、私たちは力ある人、豊かな人に助けを求めようといたします。

エリヤが出会った女性は、一握りのパン粉とわずかな油しか持ち合わせていませんでした。最後のパンを焼いて息子と食べ、あとは死を待つばかりだったのです。「恐れてはならない。まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい」。

せめて死ぬ前くらいは腹一杯わが子にたべさせたいと思うのが親心です。私ならあちこち走りまわって、逆にこの親子のため、食べ物を集めようとするでしょう。ところがエリヤは子どもへのパンをへずって、先ず自分に食べさせなさいと求めました。そしてこの母親はエリヤの言葉に従いました。偉いですね。すると次の朝もその次の朝も粉と油が備えられ、彼女の家はエリヤと共に大飢饉を生き延びることができたのです。

エリヤはケルトの川のほとりで、神さまのお言葉通り、鳥によって毎日養われました。神さまは依り頼む者を決して裏切らないお方です。サレプタのやもめも絶望的な状況でした。しかし依り頼む者は必ず救ってくださるとエリヤは確信して、「恐れずに先ず私にパンを食べさせなさい」と言えたのです。そして救っていただきました。

ここに災害の中で生き抜くに際して、第一にすべき心構えが示されています。大震災のさなかで、助け合う人の絆の大切さが注目を集めました。その動機は人の心に宿る善意でしょう。どうしてその善意がその人に宿ったのでしょうか。神さまがその善意を与え、その人を動かし、お用いになったのです。神さまは鳥さえもお用いになって、依り頼む者、救いを求める者に、応えてくださるお方です。先ず神さまの愛を信じて、神さまに助けを求めるのです。必ず救いの手が差し伸べられます。その信仰が、災害の中で生き抜く鍵ではないでしょうか。

### [結]御言葉に聞き従って生きる

イエス・キリストはユダヤ教指導者たちの誤解、妬み、憎しみから十字架にはりつけにされてしまいました。6時間にわたる断末魔の苦しみの絶頂で、詩編22編を叫ばれました。「エーリ、エーリ、レマ、サバクタニ わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」。ここで力尽きて絶命してしまわれましたが、山浦さんが言う通り、これはわが神に対する、絶対的な信頼の呼びかけだった

のです。そして神さまは、墓の中からの復活をもって、主イエスの信頼にお応えになったのでした。

ですから山浦さんは、大震災によって全てが押し流され、破壊のただ中に立って、「そうだ。神さまは私たちをお見捨てになることは絶対がない。この苦難で万事がお終いになるのではない。必ず新しい道が神さまによって示される。よし自分はへこたれないぞ！」と決意を新にしたのでした。

神さまは正義と公平と愛を求めるお方です。アハブとイゼベル夫婦の悪がどのようなものであったかの一例が、21章に記されています。ナボトを偽りの裁判で死刑にして、彼のぶどう畑を取り上げてしまいました。このような悪に対する裁きとして、神さまは大飢饉をお下しになったのでした。王の罪で国民が苦しみました。国を治める者は、神を恐れなければなりません。

しかし神の裁きは、愛と救いを目指しています。赦しと救いと祝福がこめられた裁きです。最も大きな罪への裁きである十字架刑を、罪のない神の子キリストが罪人に代って受けて下さり、赦しを備えて下さったのでした。このような愛をもって正義と公平を貫こうとくださる神の支配なのですから、厳しい裁きの中にも、救いが備えられていないはずはありません。

エリヤは大飢饉の中で、アハブ王に命を狙われながら、神さまの言葉に忠実に聞き従って、周りの者に祝福を分かち合いながら、生き抜きました。そしてこの大飢饉の結末に当って、神さまの栄光を現わす大きな御用を見事に成し遂げたのでした。それは来週学びます。

今日エリヤから学ぶことは、自分が生き延びることで精一杯の状況の中でも、私たちもまた神さまへの信頼を失わず、神さまからの恵み、命、希望を周りの方々と分かち合って生きていくことです。

救いをもたらす神さまの言葉は真実です。災害の最中にあっても神さまへの信頼と信仰を深め、御言葉に聞き従って、神さまの御用に用いられる生き方をして参りましょう。

完